



能登半島地震

熱海市長 齊藤 栄

元日の夕刻に、石川県の能登半島を中心に震度7の地震が起きました。これまでに多くの犠牲者と甚大な被害が発生しています。

熱海市は発災当日に緊急消防援助隊を、翌2日には給水車を現地に派遣。その後、被害家屋の認定調査、避難所の運営、災害マネジメントに対応する職員を送り、今後は保健師の派遣も予定しており、熱海のような小規模自治体としては精一杯の支援活動を行っています。これは、伊豆山土石流災害の支援に対する恩返しというだけでなく、職員の派遣による災害対応の経験が、熱海で災害が発生したときの大きな力となるからです。伊豆山土石流災害の際にも、熊本地震や広島風水害での職員派遣の経験が大きく役立ちました。

今回の能登半島地震では我々が学ぶべき点が多々あります。能登半島と伊豆半島という地形、そして道路の整備が十分進んでいないという類似性から、例えば南海トラフ地震が発生した場合、能登半島地震と同様に伊豆半島の多くの地域が孤立し、救助隊や救援物資がなかなか到達できなくなることが容易に想像できます。現在、伊豆縦貫道路などの整備が進んでいます。国や県に対して道路整備の促進をさらに求めていく必要があります。

市民の皆様におかれましても、これを機会に、いつ起こるとも分からない大地震に備え、ご自身の住む場所にどのような危険があるのかをハザードマップで再度確認いただくとともに、飲料水、非常食、避難の際に持ち出すものの点検などをよろしくお願いいたします。



伊豆湘南道路シンポジウム

熱海市長 齊藤 栄

「伊豆湘南道路」をご存知でしょうか。神奈川県の小田原から熱海を経て沼津を結ぶ道路構想です。渋滞解消や地域経済の発展に寄与するものとして、四半世紀前から沿線の市町と共に熱海市は推進に取り組んできました。

そのシンポジウムが2月10日に小田原で開催され、小田原三の丸ホールの1,100席がほぼ満席という盛況ぶりでした。パネルディスカッションには私もパネラーとして参加しましたが、このシンポジウムで新たな視点による伊豆湘南道路の必要性がアピールされたことは注目に値します。

一つは、「災害時の安全安心の確保に大きく貢献する点」です。先般の能登半島地震の教訓として、救援活動や支援物資の輸送のために幹線道路の整備は不可欠です。伊豆湘南エリアで大地震が発生した際、海岸線の国道135号が津波により通行不能となることを考えると、伊豆湘南道路が救助、救援のための幹線道路となることは間違いありません。

もう一つは、「日本の大動脈を補完する第三の東名となる点」です。つい先日も雪により東名、新東名が長時間に渡り通行止めとなりました。また、富士山が噴火した場合、溶岩流により東名、新東名が長期にわたり通行止めとなることが予測されています。伊豆湘南道路があれば、社会、経済に及ぼす大きな影響を最小限にすることができます。

伊豆湘南道路の早期の実現に向けて、引き続き国への要望活動などに取り組んでまいります。



令和6年度がスタートしました！

熱海市長 齊藤 栄

新年度が始まりました。新型コロナウイルスの感染拡大から約4年、伊豆山土石流災害の発災から約3年が経ち、令和6年度は熱海が躍進していくための節目であり転換点となります。新年度の施政方針の柱は次の二つです。

一つ目の柱は、伊豆山被災地域の復旧・復興の加速です。昨年9月に警戒区域が解除され、年明けの1月に岸谷2号線の工事に着手しました。逢初川の工事を行う静岡県と連携しながら、市道を再整備するとともに、消防団第4分団詰所や(仮称)伊豆山地区コミュニティ防災センターの整備を進め、一日も早い復旧・復興を目指します。

二つ目の柱は、熱海2030ビジョンの再始動です。熱海の持続的发展を目指した熱海2030ビジョンを平成30年に掲げましたが、その後起こった新型コロナウイルスの感染拡大、そして伊豆山土石流災害への対応を最優先に取り組んできました。現在、新型コロナウイルスの行動制限が無くなり、また、伊豆山の復旧・復興が着実に歩み始めたことで、2030ビジョンを再始動できる環境が整いました。

先日、静岡県で初めてとなる、「宿泊税条例」が議会承認を得ました。宿泊税は2030ビジョンにおける「観光・経済の活性化」の核となる施策です。これまでも、重層的支援体制整備事業や地域コミュニティの活性化施策などを進めておりますが、今後、「教育・福祉の充実」「仕事・くらしの変革」の新施策についても、さらに積極的に取り組んでまいります。



別府市制100周年

熱海市長 齊藤 栄

この4月1日、熱海市の姉妹都市である大分県別府市が市制施行100周年を迎え、その記念式典に参加してきました。

熱海市と別府市は昭和41年に姉妹都市提携をし、多くの親善交流が行われました。平成28年の熊本地震の際には、風評被害を受けた別府市を元気づけようと61名の熱海市民訪問団が別府市を訪れたことは今でも記憶に新しいところです。その翌年には今度は別府市の友好交流訪問団が熱海市を訪れ、さらにその翌年には「別府温泉の恩返し」として、別府市からタンクローリーで約7トンもの温泉が熱海駅前の足湯に運ばれました。

100周年記念式典は大変良く企画されていて、これまでの市の歴史を100歳の別府市民のご婦人のインタビューを通して振り返り、また、小中学生そして高校生が「べっふ未来宣言」と題して、それぞれの未来への希望を語っていました。市民全員で100周年をお祝いするとともに、新たなまちの未来を創っていかうという気概を大いに感じるものでした。

宿泊した別府市のホテルの窓外には、広大な扇状地から多くの湯けむりが立ちのぼる、別府温泉ならではのダイナミックな風景が広がっていました。熱海市と別府市は温泉の規模や地形は異なりますが、長期的な経済の低迷や若年層の流出など温泉観光地共通の課題を抱えています。これからも温泉地の両雄「東の熱海、西の別府」と言われるよう、互いに切磋琢磨してまいります。



故 小山内 美江子さん

熱海市長 齊藤 栄

先般、熱海に縁の深い、脚本家の小山内美江子さんが94歳でお亡くなりになりました。小山内さんの代表作は昭和54年から放送されたテレビドラマの「3年B組金八先生」で、この作品は学園ドラマの金字塔と言われています。当時、熱海に住んでいた小山内さんが、多賀中学校に通っていた息子さんから聞いたさまざまな話を基に、この脚本を書き上げたということなのです。

また、小山内さんは内戦によって疲弊したカンボジアの教育支援にも精力的に取り組まれました。平成5年に「JHP・学校をつくる会」を設立し、これまでにカンボジアの農村部を中心に約400棟の学校を建設してきました。そして、小山内さんは熱海国際交流協会の会長も務めていました。小山内さんの活動に深く共鳴した熱海国際交流協会は、数年に渡ってチャリティーコンサートなどの事業を通じて募金を集め、カンボジアに「熱海さくら学校」を建設し、平成23年に現地に贈呈しました。小山内さんのひたむきな情熱が熱海市民にも広く伝わり、このような偉業を成し遂げたのだと思います。早いもので、あれから十三年の歳月が経ちました。熱海さくら学校は、今でも地域の大切な学校として大いに活用されているそうです。

著名な脚本家としてのご活躍のみならず、高い志を持って国際貢献をされた小山内美江子さんのご冥福を心からお祈りいたします。



ジャカラランダ遊歩道

熱海市長 齊藤 栄

熱海サンビーチ沿いのお宮緑地にある、ジャカラランダ遊歩道を歩いたことがありますか。今年もまた5月から6月にかけて、熱海の初夏を告げる青紫色の花が、多くの市民そして観光客の皆さんを喜ばせてくれました。

ジャカラランダ遊歩道を整備して、今年でちょうど10年になります。10年前の完成式典は梅雨のどしゃ降りとなり、テントの中でテープカットをしたことを今でも鮮明に覚えています。当時は1.5メートルほどの棒切れのようだった苗木が、今では大きく成長して、房状の美しい花を咲かせています。「日陰のない熱海の海岸線に、涼しげなジャカラランダの緑陰を作りたい」と、遊歩道整備に多大なご貢献をしてくださった篤志家とくしかの故・大塚実氏の言葉を思い出します。

6月16日、ジャカラランダフェスティバルの最終日に遊歩道を歩いてみました。晴天でも暑い日でしたが、多くの来遊客にあふれ、皆さん口々に「わあ、きれいなね!」と喜んでいました。観光バスが続々と停まり、お客様が遊歩道を目指して降りていました。かつて6月は熱海の閑散期といわれていましたが、ジャカラランダの効果もあり、今では必ずしもそうではなくなっています。また、遊歩道沿いに新たなホテルが建設されるようにもなりました。

熱海の国際姉妹都市、ポルトガルのカスカイス市とのご縁で植栽したジャカラランダが、その魅力をさらに高めるよう、今後も整備を進めてまいります。



AJIRO MUTSUBI(あじろ むすび)

熱海市長 齊藤 栄

先日、AJIRO MUTSUBI(あじろ むすび)のオープニングセレモニーがありました。旧網代小学校は子どもの数の減少により、令和3年3月をもって147年の歴史を閉じましたが、地域住民の皆さんの要望を受け、地域の活性化と住民の皆さんの交流の場として再生・活用することとしました。これまでに、校舎の1・2階や食堂をオフィスや交流スペースとして、体育館を地域防災コミュニティセンターとするための改修を行ってきました。

セレモニー会場となった1階の食堂はコミュニティスペースとして明るく開かれた空間で、子ども広場やカフェもあり自由に人と集える場となっています。2階は事業者の活動に使われることを想定しており、オフィススペースは既にいくつかの企業による入居が決まり、コワーキングスペースは、網代を拠点に新たなビジネスを生み出す場としての活用が予定されているようです。

セレモニーでは、AJIRO MUTSUBIの運営団体である「あじろ家守舎」が今後の事業展開の概要を説明するとともに、この事業を応援しようとする企業やサポーター、地元町内会長や住民の皆さんが多数出席し、ここを拠点にして網代の活性化を今まさに加速しようという熱気にあふれていました。

地域の皆様には、ぜひ地域内外の方との交流の場としてご活用いただくとともに、網代を含めた南熱海のまちづくりにも積極的に関わっていただきたいと思います。



南海トラフ地震

熱海市長 齊藤 栄

先般8月8日、気象庁から南海トラフ地震臨時情報「巨大地震注意」が初めて発表されました。この発表が地震への備えを再確認するものであることから、市では同報無線やメールマガジンを使い、家具の転倒防止や非常持ち出し品の確認、ご家族と避難場所の確認などを呼びかけました。この情報は1週間で終了となりましたが、市民の皆様におかれましては、是非これを機会に、ハザードマップでご自身のお住まいにどんな危険があるのかを確認するとともに、大規模災害の際に、いつ、どこに避難するのかを事前に整理する「わたしの避難計画」を作成してください。

一方、行政側も南海トラフ地震への対応を伊豆半島の市町が協力、連携して行う必要があります。能登半島地震の教訓から、伊豆半島も道路が寸断され集落が孤立化することなどが予想されます。このため、事前に広域の防災拠点を整備することに加え、その際、各市町がどのような役割を担うのかをシミュレーションしておかなければなりません。また、伊豆半島内の観光客をどのように域外に誘導するのか、次回臨時情報が発表された際に、海水浴場や花火大会などのイベント実施に対して伊豆半島で統一基準を作っておく必要もあります。このようなことを今後、伊豆半島7市6町首長会議で議論し、実行してまいります。

市民の皆様、そして行政がそれぞれの役割を的確に果たすことで、南海トラフ地震に対応してまいります。



台風10号の被害

熱海市長 齊藤 栄

8月末に日本を襲った台風10号は、熱海市において観測史上最大の72時間雨量を記録し、市内各地で道路や住宅などが被害を受けました。この中でも市民生活に特に影響があるものが、姫の沢にある火葬場の被害です。

8月30日の夕方に火葬場の建物裏手から突然土砂が流入し、施設の従業員が危うく難を逃れたそうです。私も現地を確認しましたが、火葬場の大量の土砂だけではなく、建物の背後の斜面が県道を挟んで約200メートルに渡って崩れており、その規模の大きさを目の当たりにして大変驚きました。

土砂の流入により火葬場が使用不可となったため、当面の間、伊東市、三島市、真鶴町のご協力を得て、熱海市民の火葬を受け入れていただくことになりました。その後の調査で、火葬炉などの損傷はそれほど大きいものでなく、熱海市による火葬場の機能回復は可能なことが分かりました。問題は、火葬場背後の土砂崩壊への対応です。

私はこの土砂崩れの規模がかなり大きいこと、また、県道の復旧や治山事業などが必要になると考えたことから、静岡県知事あての要望書を作成し、県庁に要望に行きました。

併せて、国の支援も必要と考え、地元選出の国会議員に対しても支援の要請を致しました。

市民の皆様におかれましては、火葬場の利用について大変ご不便をお掛けしていますが、一日も早い再開を目指して取り組んでおりますので、ご理解いただければと思います。



熱海怪獣映画祭

熱海市長 齊藤 栄

今年も「熱海怪獣映画祭」が開催されました。「熱海を怪獣の聖地に」を合言葉に、市民の有志の皆さんが平成30年に始められ、今年で7回目となります。回を重ねるたびに多くの熱烈なファンが集まり、子どもたちも参加するイベントとなっています。

なぜ熱海で怪獣映画祭なのか。今から62年前の昭和37年の特撮映画「キングコング対ゴジラ」で、両者が熱海城を挟んで戦う場面が怪獣映画のシンボルとなっていることがあげられます。

私自身は、子どもの時にウルトラマンや仮面ライダーをテレビで見て育った世代です。スペシウム光線で怪獣を倒したり、バイクに乗りながらヒーローに変身する姿を夢中になって見ていました。

今回、私は映画祭前日に行われた座談会にパネラーとして参加しました。パネラーは、これまでゴジラやウルトラマンをはじめ怪獣映画や特撮に携わった映画監督、プロデューサー、脚本家、音楽家という非常に豪華なメンバーでした。テーマは、この世界に入ったきっかけ、作品の裏話、熱海に期待することなど多岐に及び、聴衆の皆さんからの質問コーナーもあり、予定の2時間があつと言う間に過ぎました。

熱海怪獣映画祭は、関係者の皆さんの熱意と努力で、熱海ならではのイベントに育ちました。これからも来熱する多くのファンとともに、更に盛り上がって行って欲しいと思います。



この一年を振り返って

熱海市長 齊藤 栄

年の瀬が迫ってきました。今年は1月1日に能登半島地震が発生。熱海市でも台風10号により火葬場などが大きな被害を受け、年末になっても市内各地で復旧作業が続いており、自然災害への対応に追われた年でした。

特に、能登半島地震では道路の寸断と集落の孤立化を目の当たりにして、大きな危機感を持ちました。発災の可能性が高まっていると言われている南海トラフ巨大地震に備えて、先般、伊豆半島の7市6町の首長で「伊豆半島広域防災協議会」を立ち上げました。それぞれの市町が担う具体的な役割分担を明らかにし、住民の皆様の安全安心を確保することにも、観光客の域外への誘導などについても取り組んでいきます。

また、今年は「宿泊税」が実現に向けて大きく前進した年でした。宿泊税の条例が市議会で可決されるとともに、「熱海観光局」の責任者(専門人材)を全国公募により選任したことで、これまで検討してきた観光振興の新たな仕組みが具体的な形になってきました。来年の4月から1人1泊200円を宿泊客の皆様にご負担いただきます。これにより、現在は年間約45億円の市の観光予算が倍増。その財源を活用して、熱海観光局が観光プロモーションや観光施設の投資などを行っていきます。これは全国初の取り組みです。

この1年の動きを踏まえて、来年度は市民の皆様ならびに観光客の防災対策を強化するとともに、熱海観光のさらなる活性化に向けて取り組んでまいります。